

学会展望 一日本語教育一

富 谷 玲 子

日本語教育は、世界の政治・経済の動きによって教育現場が振り回されるという宿命を持つ。日本語教育界にとって2009年は、まさに激動の一年であった。

新自由主義の展開を背景とした世界規模の人の移動が活発化する中で、日本国内でも海外でも、日本語教育は大きな課題に直面し続けている。とりわけ2009年は、日本国内では定住化する外国人に対する日本語教育、多様化する外国人の子どもに対する日本語教育（二世・三世・日本生まれの外国人家庭の子ども・国際結婚家庭のダブルの子ども・国際結婚による「連れ子」・学齢超過で入国した子どもなど）、留学生30万人計画、EPAによる看護師・介護福祉士候補者を対象とした日本語教育などが大きな話題となり、日本語教育学会をはじめさまざまな学会・シンポジウム・研究会などが毎週のように国内各地で開催され、上記テーマをめぐって真剣な議論が展開していった。

ヨーロッパでは、第二次世界大戦後から数十年をかけて検討されてきた「外国語学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment (CEFR)」が既に教育現場での実施段階に入っている。ヨーロッパ諸国の日本語教育はCEFRの枠組みの下で、教育内容・カリキュラム・評価方法の再編を行わざるをえない事態にまさに直面している。2009年夏に行われたヨーロッパ日本語教育連絡会議（東ヨーロッパ諸国の大学教員を中心とした学会）、ヨーロッパ日本語教育学会（全ヨーロッパの大学を中心とした学会）では、CEFRがメインテーマとなり現場での教育内容の再編成をテーマとす

る口頭発表が非常に多かった。

日本でも、国際交流基金が「JF日本語スタンダード」を現在開発中である。JF日本語スタンダードは、日本版CEFRとも言えるものであり、言語能力観、言語教育の理念、言語能力評価などを包括的に記述することを試みている。また、連動するように、日本語能力試験の改訂作業が進みつつあり、2010年には新試験が実施される。級制度の変更（4級制から5級制への改定）、試験の構成の変更（読む試験・聞く試験への再編）という変更点の他、日本語能力記述などはJFスタンダードを背景とするものであるという。

日本語教育は常に社会変動に敏感に反応しつつ展開してきたが、2009年ほど話題の多い年は珍しい。定住化する外国人とその子ども（最近では移民という枠組みでも考えられ始めている）に対する共通言語をどのように構築し教育として提供するののかという国内問題に加え、日本語能力試験制度の改訂という日本語の国外普及の問題もあり、さらにヨーロッパではCEFRに基づく教育内容の再編が進められているのである。

2009年は日本語教育の現在を俯瞰するために「言語政策」という視点が必要であるということ強く意識させられる一年であった。

